

青い季節

藤 卷 正 雄

一人炎を見つめていた。辺りには誰もいない。静かな夜、満天の星は刺すように僕を見つめていた。僕はこの日の為にとっておいたバーボンを一口飲んだ。そしてため息を一つついた。ゴールに達したんだという感動も充足感もなかった。あるのはやっとこの合宿から抜け出られるという安堵のため息だけだった。日本を発って幾日たったのだろうか。あのときのことは今でもはっきりと覚えている。何の感慨もないまま飛行機に乗ったあのときのことを……。僕はそのときからなんとなくこの合宿は自分にとって感傷的なものになるだろうと思っていた。一体3か月もただカヌーを漕いでいるだけなんて何と無益なことなのだろうか、他にもっとしなくてはならないことがあったのではないか。何を求めてユーコンへいくのか。出発ロビーで異様に大きく赤い夕日を見ながら僕はそう考えていた。

何を求めてユーコンへ来たのか。その問いはいつも僕の頭の中を行ったり来りしていた。考える時間はいくらでもあった。パドリングしている時目の前にある水平線を見ながら……。あるいは夕食後空に赤みが指し始めた時、地平線を歩く太陽を見ながら……。

バーに一人で行ったときもそうだった。横にいた老婆が“そんな悲しい顔をするもんじゃないよ。楽しく行こうよ”と微笑みながらバーボンのロックを僕の前においてくれた。

行程の半分を過ぎたころには一人になることを考え始めていた。皆の中にいるのが嫌いなわけではなかったが、自分がそれに同化し飲み込まれてしまうのが自分の存在にかかわるようで許せないだけだった。決して、一人が好きなのではない。人のことを気にしているよりも自分勝手にしていた方が楽なのだ。本当はそう考えてしまう自分が情けなく嫌だった。そんな考えを打ち消すかのように僕は山に登った。ずっと先に見えるピークに向かって歩いた。ピークに立ち、広く青い空、緑と茶色のカーペットのような山、そしてその向こうに太陽の光りを受けて銀色に輝くユーコンの濁流を見た。この世界には僕しかいないかのようだった。そう感じたとき、急に心細くなった。何かつかまるものがほしいと思った。ある本の文章が頭の中に浮かんだ。「時代のハードパンチに耐えられないわたしがいて、ハードトレーニングの足りないわたしがいて、だからじぶんに自身のないわたしがここにいただけなのだ。」

そのとき、はっきりと分かった。今までしてきたことは全て自分に自信をつけるためのトレーニングだったということが。僕は自信を求めてここまでやって来たのだ。そしてこれからもトレーニングは続いて行こう。

目の前で僕のパドルがシューシュー音をたてながら燃えている。赤シャツはもう燃えて跡形もない。バーボンをまた一口飲んだ。そして僕は呟いた。“センチメンタル・ジャーニーか……。”自分の殻に閉じこもっていた僕は何も見ることはできなかった。つかむこともできなかった。僕は幽霊のようにただユーコンに住む人々の前を通り過ぎて行っただけだった。何も語るまい、そう思った。僕には語る資格などないのだ。

日本の真冬のような寒気が僕をおそう。焚き火は燃え尽きようとしていた。炎の尽きた焚き火はまるで都会の夜景のようだった。最後の焚き火はひっそりと始まり、そして終わった。テントに戻りながら夜空を見上げた。天の川が幾つもの星を飲み込みながら、東から西へと静かに走り去っていった。もう思い残すことは何もなかった。このときユーコン3000キロの旅が完全に過去のものになったのを感じた。シュラフの中で、僕はユーコンの空はいつも青く澄んでいたことを思い出していた。